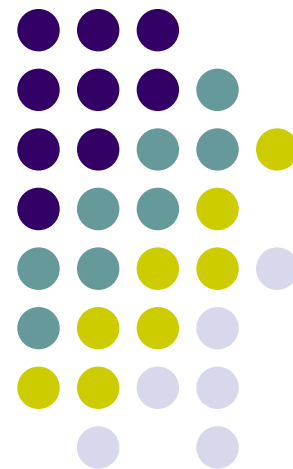


H.18年度 教育学部専門科目
臨床心理学(3)
(臨床精神医学)

教育臨床心理学ゼミ

教育学研究科付属子ども発達臨床研究センター

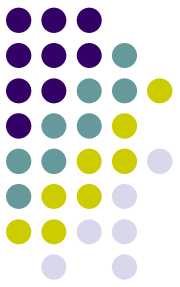
田中 康雄





本日の流れ

- 前回の意見への返答
- 親と赤ちゃん(1)
 - 親にあるということ
 - マタニティブルーについて



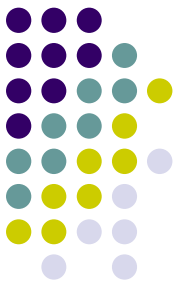
前回の意見への返答(1)

- 防衛機制について(1)
 - 基本的には「自我」を守る, 自分自身が「壊れない」ためのシステム
 - どの様式を選ぶか(選択基準)は, 自分自身が壊れない程度に「適応」できそうなものであり, 時に単独あるいは複合する
 - 防衛機制自体は, 本来健全な心の働き, 心の保護機能
 - 心(イコール自我, 自分自身)に感覚的な障壁を設けることで, 苦痛を緩和する
 - 緩和してる間に, 心がその感覚的な障壁を取り払って, 受け入れられる態勢を整えていく



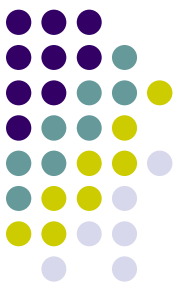
前回の意見への返答(2)

- 防衛機制について(2)
 - 解離をみたら「ああよくがんばっているな, 一生懸命にやっているんだな」
 - 解離
 - 唯一の主体が損なわれないため
 - 固有名への抵抗(匿名), 現実感の喪失
 - すべての防衛機制は, 「この時代における何らかの適応的側面をもつ」



前回の意見への返答(3)

- 防衛機制について(3)
 - 無理に記憶を戻すことはよくないことか
 - 無理に戻そうとすると、より強固あるいは別の防衛機制が作動する
 - 書きものは治療的か？
 - 処理戦略は自分自身にとって、もっとも得意なことで、より侵襲性の少ないものを選択する
 - 「もし解離したままでそれが周囲にトラブルにならず、また本人にとっても問題を生じなければ、それはたんにひとつの人格類型となる。また解離は、しばしば受忍しがたいような困難な局面を生き延びるため生存戦略のひとつとさえなる」
- 事例紹介: DVから解離性人格障害にいたった例



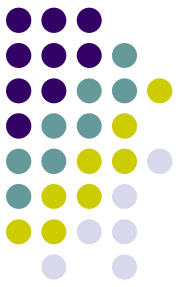
前回の意見への返答(4)

- 診断の意味、最近の諸診断の意義
 - 分類するためには「理論」が必要で、理論は現実を説明するツールとなる
 - 現実と理論が解離したとき、改めるべきは理論である
 - ルーピング効果(イアン・ハッキング)
 - 分類が疾患を生み、疾患が分類を更新するという循環的効果
 - 柔軟で実用性の高い疾患分類ほど、当該疾患を増加させる効果をもつ



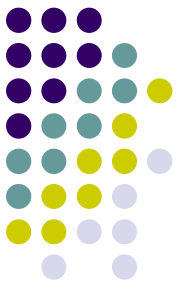
前回の意見への返答(5)

- 不登校について
 - 1932年(イギリス)登校拒否事例の報告
 - 1641年(アメリカ)学校恐怖症の症例報告
 - 1952年 アメリカで大きな問題になる
 - 1957年(日本)登校を嫌がる女兒とその母親(宮城の児童相談所の報告)
 - 学校に向かわせる力への不安・恐怖(参加への不安)
 - 学校に向かわせる力の衰退(参加する意義の喪失)
 - 個人主義、経済的課題、多様化、封建・支配力の低下など



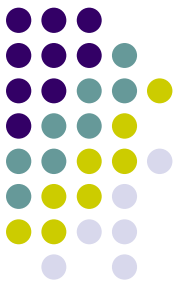
前回の意見への返答(6)

- 別な視点からの時代的評価(1)
 - 1960年代
 - 理想の時代、高度成長期
 - 戦後日本社会の転回点:1970年代
 - 理想から虚構へ
 - 1970年代
 - 理想からの疎外
 - 虚構の時代(バブル), 欠如の時代
 - 最終戦争をテーマとした漫画の台頭



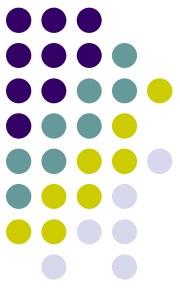
前回の意見への返答(7)

- 別な視点からの時代的評価(2)
 - 1980年代
 - 虚構の時代の黄金期, 欠如の不在の時代
 - 東京ディズニーランド 1983年開園
 - 新人類からオタクへ
 - 価値の二分化 ダサい ナウい, ネクラ ネアカ(明確な所属欲)
 - ~なんちゃって
 - シリアスな話を一気に転覆, 緊張感から脱出
 - 分裂的思考



前回の意見への返答(8)

- 別な視点からの時代的評価(3)
 - 1990年代～
 - 所属の多様化
 - 主体の複雑な分裂化: 解離
 - 行為の外在化(行動化)から, 内面化(自傷, 自殺)
 - 自己破壊, 自己破滅行為こそが, 自己証明となる
 - てゆ～か, つ～か: 強烈なりセット効果, 話題の強制的・暴力的中断(切断, 解離)
 - ～だし, ～みたいな: 曖昧な判断保留的でありながら, 主体的な判断を維持している, とっかかりのない決定



前回の意見への返答(9)

- 別な視点からの時代的評価(4)
 - アイデンティティ, 自己同一性, 自分とはなにか
 - 誰がアイデンティティを必要とするのか
 - 社会的要請
 - アイデンティティとは, 主体化されること
 - 主体化されるということは, 他者になる過程
 - 他者の秩序への従属者になること
 - 同性の同年代の友人という「他者」を通して行える「主体化」
 - アイデンティティが危機的状況にあるということは, 時代の精神病理そのものか? 適応状況か?



前回の意見への返答(10)

- **社会の心理学化・医療化**
 - 非行から行為障害へ
 - 反発, 自己主張から反抗挑戦性障害へ
 - 適応と自己解決を阻害する, 悩みの「カウンセリング」化へ
 - 心のコントロールへの希求(無力化)



前回の意見への返答(11)

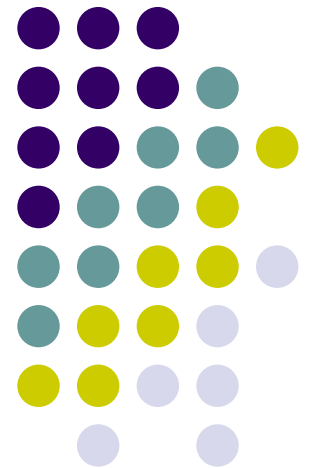
- 少年犯罪の凶悪化
 - 大きな問題は事件を犯すことに対する「葛藤」の不在
 - 暴力への閾値の低下
 - 抑制力の低下, 脆弱化
 - 社会共同の規範性の崩壊
 - 事件への同一化(アイデンティファイ)への希求
 - 暴力から生じる支配感, 征服感への希求
 - いじめ(一面的な弱者への暴力) がその萌芽か?



参考文献

- 勁草書房「脱アイデンティティ論」上野千鶴子編
- ちくま書房「虚構の時代の果て」大澤真幸
- 中公新書「社会の喪失」市村弘正, 杉田 敦
- 春秋社「少年の『罪と罰』論」宮崎哲弥, 藤井誠
二

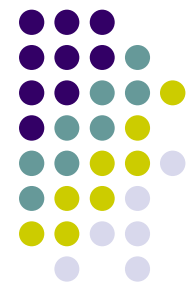
親と赤ちゃん(1)





妊娠の心の段階

	親にある人の心理
妊娠第1期	～3, 4ヶ月 喜びと不安, 新しい責任感, 幼児期の回想
妊娠第2期	～7ヶ月 5ヶ月くらいから胎動(胎児の自覚, 個体の意識) 出産後の不安と期待
妊娠第三期	おなかのわが子への語りかけ
出産	胎児との生理的分離, 子どもへの適応, 新しい家族作り

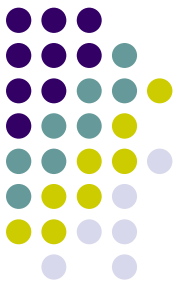


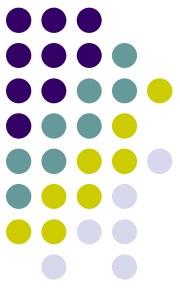
生まれた直後の混沌とした世界



出典：育児の認識学—こどものアタマとココロのはたらきをみつめて、海保静子、現代社、1999年

子どもはどのように関係性を認識するか？





親になるプロセス

- 出産後の女性は、感覚と体験に違和感が生じる
- これまでの行動＝思考＝感情システムが機能失調に陥る
- 理念では理解できるが、実際に有効な行動が取れない
- 要求と責任は感じるが、出来ないことで自己概念が傷つく
- 不適切感を抱きながら自律性が喪失する
- 公的知識, 他者の経験, 文化的価値に依存的になる
- 自己のこれまでの体験記憶が活性化する(世代間伝達)
- 新しい行動＝思考＝感情システムが機能する
- 親になってゆく(反抗期になると, 再び2)へ戻る)



産後の問題

- ブルー:10人中8人(80%)
- 産後うつ:10人中1~2人(10~20%)
- 産褥精神病:200~500人中1人(0.5~0.2%)
 - 躁状態
 - うつ状態
 - 統合失調症
- 虐待
- 子どもへの影響
 - 情緒障害
 - 軽度発達障害



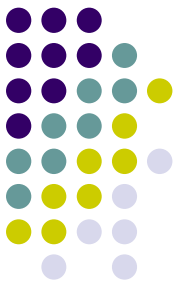
ブルーについて(1)

- 産後10日間, もしくは12日間のうち, 明確な理由無く「突然泣き出す」状態
- 生理的な自然な反応
- 80%に認められる
- 三日目ブルー, 四日目ブルー, 五日目ブルー, 十日間泣き虫とよばれた「情緒的混乱」
- 哀しみの涙ではなく, 「さまざまな感情の涙」, 過敏性との関連



ブルーについて(2)

- 症状
 - 泣くこと
 - 精神的/肉体的疲労
 - 集中力の低下
 - 記憶力の低下
 - 混乱/不安
 - 夫に対する敵意
 - 授乳拒否
 - 子どもへの関心のなさ
 - 偏頭痛, 喘息の動揺
 - 2週間以上続く場合は, 産後うつへの移行を検討する



ブルーへの対応

- ごく自然の生理的な現象であること, という理解
 - 啓発. 啓蒙
- 2週間, 様子を見て次の対応を検討する
- 身近な方々のさりげない支えが必要
- 責めないこと, 頑張らせないこと, 感情を変えることを強要しないこと



産後うつについて(1)

- 分娩後の10～20%の女性に認められる
- 分娩後1年間あるいは月経の再開前に、医学的対応が必要な重篤な症状であること
- 分娩後6ヶ月前後がピーク
- 認められる人と生じない人の違いについては不明である
 - うつの既往についても賛否あり(二度目の妊娠での再発率は68%と高い)
 - パートナーの不在, 子どもの喪失体験の有無, 早産, 病弱な子どもの存在, 子ども時代における母親の喪失, 経済的問題などとの関連が注目



産後うつについて(2)

- 症状

- 情緒面

- 抑うつ, 無気力
- イライラ感, 興奮, 怒りっぽい
- 楽しみ感のなさ, 感じなさ
- 不安感, 混乱
- 心氣的
- 自信喪失
- 集中力低下

- 行動面

- 子どもへの拒絶
- さまざまな事柄への対応困難さ

- 身体面

- 疲労感
- 不眠
- 疼痛
- 不要な乳汁分泌(過多)
- 食欲の異常
 - 空腹感のなさ
 - 食欲の昂進, のどの渇き

- 精神症状

- 妄想
- 幻覚
- ひきこもり

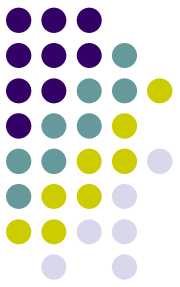
- その他

- 夫婦間の亀裂



産後うつへの対応(1)

- 以下のことを真っ先に伝える
 - 本来の疾患である, という理解
 - 自らが生み出した病状ではない
 - 母親として不適切, 子どもへの愛情の有無といったことと無関係
 - 精神的に弱い, もろいから生じたのではない
 - 立ち直ることを急がせてはいけない
 - 回復に時間はかかるが必ず回復する
 - 周囲の方々の支援が重要である(特に配偶者)



産後うつへの対応(2)

- 以下のことを配偶者に伝える
 - なぜ、生じたかという「理由」はない, あるのは目の前の現実だけである
 - 犯人捜しにエネルギーを注がない
 - 妻を責めてはいけない
 - だれの責任でもない
 - あなたが理解を示し, 見守ることで回復はよりスムーズに行く
 - 周囲の非難, 批判から護る



産後うつへの対応(3)

- 以下のことを配偶者に伝える
 - 症状であるという理解(一過性で元に戻る)
 - 妻からの攻撃に耐える
 - 気分の変動に耐える
 - 今は、あなたに気が回らないが、それは愛情のなさからではない
 - いかんともしがたいことである



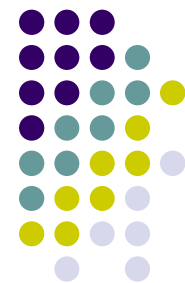
産後うつへの対応(4)

- 以下のことを配偶者に伝える
 - あなたが出来ること:伝達
 - つらいね, という労いの言葉
 - 必ず良くなるからという肯定
 - 今は完璧を目指さない, 休息が必要
 - 今, もっとも大変なのはあなたであるという認識
 - あなたは, 最善を尽くしているという理解
 - 私はあなたと子ども, 家族を愛しているという意見表明
 - 子どもも, 私も大丈夫であるという安心



産後うつへの対応(5)

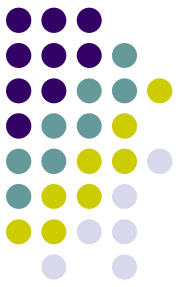
- 以下のことを配偶者に伝える
 - あなたが、してはいけないこと
 - キミがこれを乗り越えないといけない
 - ボクも疲れたよ
 - 早く調子よくなってね
 - なんて不幸だ
 - 早く立ち直って、しっかりして.
 - 子どもがほしくなかったから？
 - ひとりで頑張れ などの突き放しと焦り感の伝達



産後うつへの対応(6)

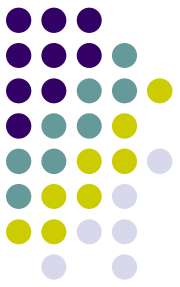
● 自助対策

- この状況を正しく理解する
- この間, 転居など生活スタイルの変化は抑える
- 相談相手を見つける
 - 今の感情などを正直に吐露する
- 休息することを学ぶ
 - 子育て支援の依頼
 - 生活支援の依頼
- 十分な栄養をとる
- 配偶者と楽しむ



産後うつへの対応(7)

- 緊急対応: 以下のようなことが認められたら医療機関へ
 - 自傷行為
 - 幻覚, 妄想
 - 不眠の持続
 - ひきこもり
 - 死への誘惑
 - 宗教的観念への没頭
 - 極度の絶望感
 - この子(配偶者)は, 私がいないほうが幸せである, といった自己否定的言動



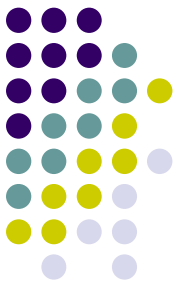
産後うつへの対応(8)

- 医療機関の対応
 - カウンセリング/心理療法
 - 薬物療法
 - 抗うつ薬
 - 抗精神病薬
 - 入院
 - 母子同伴の有無(功罪)
 - 休息



出産後の精神病

- 産褥期精神病：分娩後3ヶ月以内に認められる精神症状全般（産後うつも含まれる）
- 3つの柱
 - 躁，うつ，統合失調症
- 対応は精神科医療で



子どもへの影響

- **ブルー: 日常的支援**
- **産後うつ: 配偶者の理解から**
- **産後の精神病, あるいは元来ある精神科疾患: 愛着形成の困難さ, 情緒的混乱, 虐待, 軽度発達障害**
- **その他: 離婚, アルコール, 薬物乱用**



参考文献

- 金剛出版「母子と家族への援助」吉田敬子
- 金剛出版「母子臨床と世代間伝達」渡辺久子
- 現代社「育児の認識学」海保静子
- The postpartum husband practical solutions for living with postpartum depression. Karen Kleiman, MSW. Xlibris Corporation